

令和元年度第1回神奈川県鳥獣総合対策協議会 サル対策専門部会

開催日時 令和元年12月17日(火)10時00分から12時00分まで
開催場所 産業貿易センターB1F B102会議室
出席者 三谷 奈保(部会長代行)、安富 舞、小島 望、多田 薫、平本 稔、山田 則夫、
大森 裕一、深澤 豊和、熊澤 信一、配島 剣人(五十嵐委員代理出席)
委員 15人中10人出席(過半数)により会議は成立

会議の経過は次のとおりです。

1 開会

2 あいさつ(田中課長)

3 案件

本日の部会運営について

- 事務局: 本日は、委員改選後の最初の部会でございますので、部会長を選出することとなりますが、事務局としましては、本日、学識経験者の中から、サル検討委員会でも委員長をお願いしている、小池委員に部会長をお願いしたいと考えていたところ、急遽、体調不良により御欠席となりました。また、副会長は、会長の指名となっておりますが、こちらも決まっておりません。従いまして、事務局からの御提案ですが、本日は部会長の代行を立てて部会を進行したいと考えますが、御意見のある方いらっしゃいますでしょうか。
- 委員: 異議なし。
- 事務局: それでは代行には、小池委員と同じく学識経験者でサル検討委員会の委員でもある、三谷委員をお願いしたいと思いますよろしいでしょうか。
- 委員: 異議なし。

議題(1) 令和元年度神奈川県ニホンザル管理事業実施計画の実施状況について

- 委員1: S群は2頭になり、農作物の被害は減っていますが、南足柄まで来ていて、従来のS群の通り道を受け継いでいる状況です。この2頭をいつまでに捕獲をするか目標を掲げてほしいです。
- 事務局: 現在の計画では、S群の群れ除去の目標を令和元年度末までとしています。実際にどのように実施していくのかは小田原市や箱根町と相談していきます。
- 委員1: 今年度末までに進めていただきたいです。
- 委員2: たくさんいたS群がおかげさまで2頭まで減少しましたが、この2頭が最悪で、住民からは精神的被害を訴える声がたくさんあがっています。今後H群も全頭捕獲を早急にやらないと同じような状況になると思います。S群については今年度末までに除去となっておりますが、それだけでなく、技術的支援を市などに御教授願います。
- 事務局: かながわ鳥獣被害対策支援センターができて今年で3年目ですが、当初からS群の捕獲わなの指導や成獣捕獲の指導も担当の方と一緒に相談に乗っています。今後も相談を受けますの

でよろしくお願ひします。

- 委員3: S 群については、技術支援を行うといったアバウトな話しではなく、2頭が現在どこに居ついていて、今何が課題で捕獲できていないのかという具体的なことを教えていただきたいです。また川弟分裂群のカウント数が 26 頭ということで、これは部分カウントで、分裂の分裂がいる可能性があるという理解でよろしいですか。ダムサイト分裂群は、捕獲を担当していますが、5頭カウントした後に5頭程度捕獲をしています。また捕獲後に実際7頭くらい見ているので、現在5頭以上いることとなります。煤ヶ谷群は元々いた地域である飯山の白山の方でオトナメスを1頭目視しているの、それが残っていることを確認しています。S 群の具体的なところと川弟分裂群についてお聞かせ下さい。
- 事務局: S 群は発信器がついているので、資料1の3ページにある赤い丸が発信器個体をモニタリングで確認した位置になります。主に板橋の住宅地の界限に2頭で出没していて、住宅地をノラネコのように動いています。大型囲いわなも富士山にありますが、そこに行ってはいるが捕まえることができず、はこわなにも寄り付かない状態です。昨年度は麻酔銃捕獲のチャレンジもしました。川弟分裂群については5ページのとおりで、支援センターの委託業務のカウント調査で 26 頭しか確認できていません。昨年度宮ヶ瀬湖の東側にいたはずなのに、愛川公園から宮ヶ瀬東湖畔にサルがいることを確認していて、経過からみて川弟分裂群がまた分裂してしまい、湖の東と西にいるのではないかという予想です。ダムサイト分裂群は業者が5頭しか確認できなかったが、相模原市からは他にも確認していると聞いているので、モニタリング業者へは情報提供します。煤ヶ谷群は厚木市からオトナメス1頭とコドモ2頭と聞いているので、それもモニタリング業者に情報提供しています。
- 委員3: 資料は外に出るものなので、部分カウントや分派の可能性がある場合は、その旨の記載をお願いします。S 群について、大型囲いわな、はこわなに入らなくても周辺に来るのであれば、横にくくりわなやアライグマ用のトラップでサルが特定できて捕獲できるようなものを試験捕獲という形で、その日のうちにかけてその日のうちに解除して確認する形で導入する手法もありかと思ひます。状況を聞いていると今のやり方だけでは入り待ちの受身の対策になり、昨年度、箱根町役場に居ついているので麻酔銃捕獲の要望を受けたが、委託を受けている期間に行かなかったこともあるので、今年度もこのまま逃げられてしまう可能性があるの、もう少し攻めの捕獲方法を検討願ひします。
- 委員4: 麻酔銃や近くにいる個体であれば、個体を特定して早急に捕れる気がするので、はこわなだけではない方法を試せる体制の検討をお願いします。

議題(2) 令和元年度ニホンザル管理事業実施計画の計画変更(K1、K2、K3、K4、ダムサイト分裂)について

- 委員5: サルがはこわなに入るのはなかなか難しいという感覚ですが、ICT わなとは具体的にどのような形のものですか。
- 事務局: ICT わなのイメージは大きなはこわなです。はこわなの入口をカメラで確認し、遠隔でトリガーを落とせるもので、中にサルがいることを確認してから捕獲できるものです。伊勢原市や厚木市でも設置事例があり、効果があがっていることは確認済みです。
- 委員5: はこわなは現状のままでやっていくということですか。
- 事務局: 現状の1頭ずつ捕まえるタイプのはこわなどなかなか捕まえにくく、目標までの捕獲が進まないです。ICT はこわなは一回に何頭でも一斉に捕獲できるので、捕獲を進めるための変更として相模原市から協議を受けています。
- 委員4: ICT はこわなは誰かがずっと監視しているのですか。

- 事務局： 基本的には市の職員や捕獲を請け負っている業者が確認をしていると思います。
- 委員3： 今後、第5次計画に向けて、南秋川地域個体群の管理自体をどうするか考えたときに、K3群の位置づけの検討が必要になります。実際に管理や個体の調整ができそうな群れとできなさそうな群れが今回分かってきたと思います。K3群については現在餌付けを開始していますが、かなりICTわなに誘引されています。今年度は特に山の実りも良くなく、かなりの頭数が捕獲されると思います。そういったときにしっかり個体数を抑えるための捕獲をすることが重要なので、計画数の変更には賛成です。カウントの際の性年齢構成の区分の識別がなかなか難しいので、変更案のところ、カウントではワカモノメス0頭となっていますが、実際にICTわなで捕獲され、個体識別するとワカモノメスに該当する個体がオトナメスに含まれています。これはカウントするときにコドモを連れていてオトナメスとなっているからです。実際識別すると若齢個体のワカモノメスに該当する可能性があるのと、オトナメスの大々的な捕獲の計算をやっていないので、その群に対して25%のメスを捕るのは上野原市に行動域が拡大していることもあるので、後が恐い状況があります。そのためシミュレーション案として、捕獲後の頭数は変わってこない、例えばアカンボウからワカモノメスまでで30頭でオトナメス5頭にするという形のほうが、現在の餌付け状況やカウントの結果に即した数字だと思いますので、検討をお願いします。
- 事務局： この捕獲計画数は事務局だけの判断ではなく、学識経験者や相模原市との協議の上、今後調整して行きたいと思いますので、35頭程度の捕獲計画数にすることで異議が無ければ細かい調整をしていきます。

議題(3)第4次神奈川県ニホンザル管理計画における中間年とりまとめ(速報)と今後のサル管理計画の検討課題について

- 委員2： 参考資料3のH群検討会での取組みについて、地元からも早く全頭捕獲してほしいとの要望もあるので、令和4年度の第5次計画の際には御考慮いただきたいです。
- 事務局： こちらとしてもH群の地域における被害軽減や根絶を目指しています。ただ、そのためにいきなり全頭除去が必要かは検討が必要で、地元の方々とも調整しているなかで被害軽減のための個体数調整を実施して、被害の軽減やサルと人の棲み分けを考えています。全頭除去が全くないわけではなく、きちんとした検証を重ね、群れの方向性や群が生息している小田原市、真鶴町の被害軽減をどうしたら達成できるか考えながら進めていければと思っています。
- 委員1： 農業被害の件数が減っているのは数字上だけで、農家の中には、被害報告を出しても無駄というあきらめムードがあるので、報告件数が減っています。実際の被害は倍以上になっていると思っています。私もH群検討会に参加し、県も農家の話を聞いていると思います。今年はサル、イノシシの被害が海岸線の特にミカンを作っている地域に出ています。ミカンの木の上3分の一がサル、下3分の一がイノシシの被害にあっています。ということは3分の一しか収穫ができていない農家がかなりあります。石橋地域では、外に出るとサルがいて、女性や子どもは威嚇をされるので、家から出られないという話も聞いています。防除ネットもやっているが、隙間から入り、みかんを食い荒らし出て行くので、追い上げ、追い払い、防除ネットをやってきたなかでどれも対応しきれないのが現状と聞いています。3回目の検討会の中で特に時間がかかったのが、6ページ7の総括の表現についてです。県の資料では、全頭捕獲を「検討する」とあり、出席者の中では「検討」では済まされないという声がありました。そんななかで「捕獲を位置付けることが必要である」という表現に変更されたのだと思いますが、まだこの表現では生ぬるいと思います。また、丹沢湖群は増える恐れがある。また拡大しつつあるとあ

りましたが、増えるおそれがあるのならすぐに対応していただきたい。昨日、JA を含めて山北町で煙火の講習会をやりました。ただ現状は、煙火の講習会をやり、住民が追い払うしかやっていません。追い払い隊も結成されていないと思われます。山北町と連携しながら増えていくものをどう防ぐか、増える予測があるのならすぐに対応してください。

- 事務局： 昨日の山北町の講習では、支援センターが講師をしました。そのあと山北町の担当の方と打ち合わせをし、追い払いと捕獲もできる体制をつくる相談をしてきました。担当者も替わり初めての経験なので、支援センターも技術的な面をフォローしながらやっていく準備をしています。山北町もやる気を出してくれました。
- 委員6： 追い上げと追い払いの言葉の違いは、追い払いはその場所から除去すること、追い上げはサルがそこで生息できるような場所に追い払っているという考えで良いですか。
- 事務局： はい。
- 委員6： 追い上げ先は、何か調査をして、エサ資源などから、ここならサルが定着できるという場所かを考えていますか。そうでなければ追い払いたいして変わらないのではないですか。全頭捕獲を認めてしまうと神奈川県がやっているサル対策の群れ管理は失敗したとしか思えません。現場を何度も見えていますし、農家の方々の考え方も理解している上で言いますが、農家側にもまだまだできることがたくさんあると思います。ボランティアを使うやり方やそういったことを行政側がコーディネートするなり、地元の観光協会を使うなり、まだまだできる余地があると思います。農家側の防除方法もまだまだあると思います。野生動物の被害は、数を減らせば減るというわけではないので、そのことを念頭に置いて考えていただきたいです。
- 事務局： 追い上げ目標エリアはサルが生息できる広葉樹林があるか確認の上で目標設定しています。すべての群れで現地を確認し、ここなら大丈夫というわけではなく、群れの行動域も変わるので、今回、4次計画の中間年なので見直しの検証をすすめているところです。H 群検討会の文言は、事務局側としても、ただ数を減らせば全て被害がなくなり解決するとは考えていません。ただ H 群については、群れの中で加害性の高い個体の割合が多いと聞いています。群れの加害性が高いまま追い上げや被害防除対策を行うには限界があるので、加害性の高い個体をまず除去して、その結果群れの個体数が減るのも仕方ないということで、文言に集約しています。農家の中で新たに柵を設置してもらえそうなところを調整してもらい、追い払いの方法も検討しているので、決して被害があり全頭除去すれば被害が解決するとは話してなく、検討会でも伝えていきます。その上で地元の方々と何ができて、誰がどのようにやっていくかというのをこれから進めていこうとしています。
- 委員6： 全頭捕獲は乱暴に見えます。加害個体が多く見られるのは理解できますが、だからといって全頭捕獲というと飛躍があるように思えます。加害個体の除去を強めるなどの言葉であればわかりませんが、全頭捕獲というと加害個体ではないグレーな個体も根こそぎ捕獲するという考え方になるので、この言葉を使うことには賛同できません。農家の防除ネットだけではなく、取り残しなどがずっと蓄積した結果という面も否めない。なぜこの被害が多くなるかは被害が多くなる理由があるからです。サルは一番学習能力があり対策が難しいです。だからこそ徹底しなければいけないのは人間側です。取り残しなどを放置している一方でいくら被害個体を減らすというのは到底無理で、どのように徹底していくのかアイデアを出さないと、捕獲が先に来ると解決は程遠いと思えません。
- 委員1： 農家側のできることがあるということですが、取り残しだからではなく、収穫する前から入ってきます。収穫の直前や真最中から来るので、取り残しでは無いです。なるべく残渣を残さないように指導しています。農家側ができることは長い間戦ってきているなかで、ネットや追い払いをやっています。

追い払い隊も農家も高齢化になり、ネットを誰がやるのか。農家はサルのエサを作っているのではなく、自分の生活のために作っています。追い払い隊の高齢化があり、お金もかかるので、死活問題になっていることを理解していただきたい。

- 委員6： 残渣の問題に関しては現時点でなく蓄積だと思います。そういうものがあってサルは学習し、餌場と思っているので、シーズンが変われば収穫前から取りに来ます。残渣をなくすことは当たり前で、同時に防除の取組みを徹底していくことが必要です。高齢化はどここの農家も集落もそうですが、都市部からのボランティアを集める提案や企画が必要になるのではないですか。行政や地元観光協会で企画し、そういった取組みも入れないと、数を減らす、減らさないだけの話になってしまい、農家側も地域としても将来がないと思います。
- 委員4： 更に行動域を広げている半原群と鐘ヶ嶽群が経ヶ岳群、煤ヶ谷群を全頭捕獲し、抜けたところに下がってくることを抑えられないと、全部捕らなければ被害問題は解決しないことになってしまうので、経ヶ岳群、煤ヶ谷群を全頭捕獲したあとにも被害が無くならない場合、対策はどうするのか。実効性のある被害対策に取組んだ方がよいと思いました。
- 委員3： 群れ除去の成功事例があると、自治体としては群れがいる限り除去したいという意見になり、環境行政担当からもそういった声になります。農業被害対策の視点での議論だけだと生活・人身被害の根絶と農業被害の軽減といえば群れは一つもいらないという極論になってしまいます。神奈川県はモニタリングを行い、群れ管理が進んだ地域です。そういった地域は国内ではほとんどなく、兵庫県が唯一西湘と同じように全域が希少な地域個体群で維持をしながらやっています。神奈川県の中で今後予想される状況がわかってきているので、除去した地域でもエサ資源があれば隣接群が入ってきます。今は厚木市が頑張っていて、定着を防ぐ追い払いをしています。予算上も国の特措法や県の交付金でやっています。被害が減れば国の交付金は出ません。農業被害が減れば、今、追い払いの人件費に払っている特措法の交付金は出ません。しかし、農業被害が出ないように群れの侵入を防がなければならない状況になります。他の地域もそうなります。H 群も追い払いをやっていますが、今後も地域個体群を保全していく場合、農業被害対策の観点だけで実施体制や対策をとることではなく、神奈川は次の段階として、どうやって保全しながら群れを管理していくのかという新しい考え方をしていかなければいけない時期にあると思います。そういった中で神奈川県は要素や手法が揃っています。支援センターに専従職員がいること、GIS やドローンを駆使したデータも全て揃っています。サルのポイントデータもあり、被害がある農地がポイントでわかります。例えばそういった農地に適切に防護対策の予算が配分できるように地域協議会に示すこと。ドローンを活用して、管理が必要な農地や、狙われている農地に対して支援センターの専門員が専従で対応するなど、新しいやり方を考える必要があります。例えば H 群をメインに新しい取組み体制の構築のためのプロジェクトチームを作り、違うアプローチの立場の方をメンバーに入れ、被害を受けている農家の方の意見を具体的に聞きながら、新しいアイデアを取り入れることに取組まないと同じことがこれから神奈川県全域に起きます。厚木市、相模原市、伊勢原市、農協は群れ除去ができた場合、新しい群れが来たら丹沢山地に群れがいなくなっても、除去させてくれとなり、県は返す言葉が無い状況になります。そういった状況に対して神奈川県では地域個体群をどの程度で保全して行くか、新たな体制を構築できるか担当の方ではなく、上の方に御意見をお聞きます。
- 事務局： サルの被害の状況を心情的に理解できますが、一方では保全していく立場でもあるので、サルの被害については我々も悩んでいるところです。いろいろな課題が見えてきている中で新しいやり方を検討していかなければいけないのかと。全頭捕獲を仮にしたとしても次に新しい群れが入って

くる状況はかわらない。それは集落環境が整っていないと同じことが起こる可能性があるのですがどうしたらいいのか課題だと思っているので、みなさんのお知恵をお借りしながら検討していきますのでよろしくをお願いします。

- 委員3: シカは保全センターや丹沢大山再生委員会のようなプロジェクトチームがあります。サルは農業被害よりも特に小田原市は生活被害のほうが顕著です。状況は違いますが、支援センターができていますので、重点取組地区に配置することもわかるのですが、こういった意見やH群の待ったなしの状況を受け、一人でも、週の半分でもよいので、H 群対策に専従の職員の配置をぜひ御検討をお願いいたします。
- 事務局: ここで明言はできませんが、H 群については農業被害だけでなく生活被害、人身被害がかなり起きていると聞いているので、検討できるようなことは考えていきたいと思います。専従のことは今ここでは明言はできません。
- 委員4: 生活・人身被害件数を字ごとにまとめていますが、群れの被害の具合の性質は群れごとに違うので、群れごとに人身被害を出している群れがどれで、過去何年間にどのくらい出しているのか、群れの名前別にわかる方が住民には活用でき、他の群れに比べて自分のところはこれくらいといった加害度がわかると良いと思います。
- 委員3: 被害が激減した字もあるので、そこで何が行われたのか対策の関係性が見えるような解析をしなければいけないと思います。伊勢原市や厚木市、小田原市は複合電気柵を張っており侵入を防いでいる事例もあるので、被害件数との相関があるのか見られると良いと思います。
- 委員4: 資料 4 の3ページに捕獲による分裂が確認されていないとあり、その下には川弟分裂群は分裂が疑われているとあります。何か捕獲以外で川弟分裂群がさらに分裂したことが疑われる要素があれば教えてください。
- 事務局: 川弟分裂群の分裂は個体数の増加が原因と考えています。昨年度から別行動していることが確認されているので、個体数の増加によって現時点では別れているのではないかと思います。
- 委員3: 川弟分裂群は今年銃器で宮ヶ瀬湖の南側で5、6頭捕獲されています。そこではない地域に移動したグループがいると考えると、捕獲個体にメスも含まれているので、清川村と相談して状況を見ないといけないと思います。逆に 50 頭以上となると川弟群と別れるきっかけを作ったかもしれません。
- 委員3: 資料3の県民説明会について、いつも県が叩かれて終わっているイメージですが、出席者はどういった感じで毎回来ていて、アナウンスはどのようにしますか。保全に関して検討するとなるとそういうことに興味があってお金をだしてくれる方に聞いていただくことも必要ですが。
- 事務局: 現時点ではサルが生息している関係市町村と県の関係機関、各地域県政センターをメインにお知らせを配布して来ていただいています。
- 委員3: 野生動物関係の研究機関のメーリングリストや保全に関わる団体が所属しているところにはアナウンスしていませんか。
- 事務局: はい。していません
- 委員3: 県民説明会なので公開だと思うので、委員の方からそういったところにアナウンスすることは可能ですか。
- 事務局: 鳥獣総合対策協議会委員にも周知するのでその関係に周知していただけると助かります。

議題(4) その他

- 事務局：サル個体に GPS 発信機による傷ができています。事例が今年度3件報告されています。原因は解明できていませんが首輪装着による傷があったので調査していきます。何か情報があれば現在の状況をお知らせ下さい。
- 部会長代行： それでは本日は委員の皆様から様々なご意見をいただきましたのでこれらの意見を十分に踏まえてニホンザル管理の取組を進めていただきたいと思います。
- 事務局： 以上をもちましてサル対策専門部会を閉会します。本日はありがとうございました。